



本号の内容

□冬に語る

・建設系 NPO の支援組織設立に関わって

□事業報告

・県南卸団地 DCP 勉強会

□活動報告

・第 16 回 CSN サロン 土壌学とは
・創立 10 周年アンケート結果報告
・CSN のうごき

□トピックス

・土木学会 100 周年記念出版ご提案採択

□コラム

・連載
市民活動デビュー秘録(下)
・東南アジア技術者交流とジャワ原人探訪の旅

□ 冬に語る □

建設系 NPO の中間支援組織設立に関わって

代表理事 辻田 満

はじめに

2014 年が明けました。会員の皆様にとりましてご健康とご多幸の 1 年でありますことを心より祈念申し上げます。

2014 年 8 月にはシビルサポートネットワークも創立 10 周年を迎えます。

この 10 周年の節目に、建設系 NPO を支援する中間支援組織が創設される運びとなりました。

10 年前にその当時は組織数も少なかった建設系 NPO 法人としてシビルサポートネットワークを設立して活動を行ってきました。



その活動において 100 年の歴史ある土木学会から独立した建設系 NPO を支援する中間支援組織の設立に参画することが出来たことは感慨深いものを感じています。

活動の経緯

新しい公共や共助社会づくりなどの言葉で表される、官・行政に頼らない地域・市民の主体的な働きで公共的サービスを提供し、これによって社会的課題を解決しようとする、いわゆるサードセクターの動きは、地方自治体レベルでは旧くから実践されてきていると見られていますが、このような動きが社会的に大きな注目を集めたのは、阪神大震災後の NPO や NGO 等のボランティアやコミュニティとしての活動であったと思います。

このような社会的背景を受けて、国はその活動基盤を整備すべく、平成 10 年に「特定非営利活動促

進法」、いわゆる「NPO 法」を施行しております。この動きを受けた中で、土木学会の活動として NPO に関わる動きは幾つかありましたがその活動からは顕著な進展は見られませんでした。

その後、平成 19 年秋に教育企画・人材育成委員会の下に設立された「成熟したシビルエンジニア活性化小委員会」が今回の建設系 NPO の中間支援組織設立の発端となり、この委員会活動においてシニアエンジニアに生き甲斐と一定の収入を与えるものとして NPO 活動に注目し実態調査を通じてその課題・問題点も把握することができました。

私が関わるきっかけとなったのは平成 21 年に土木学会が主催した NPO 活動に関するシンポジウムでシビルサポートネットワークの活動に関して講演する機会があり、その講演がきっかけでシビルエンジニア活性化小委員会の委員として活動に参加することとなった訳です。

サードセクターを構成する個々の建設系 NPO 等はおよそ数百団体に上っていますが、概して小規模であり、財政基盤も脆弱で人材も限られており、多くの課題を克服できる力を備えていないのが実態となっています。

教育や福祉などの分野では、個々の NPO の連携と支援をめざした中間支援組織が構築され多くの成果を挙げている一方、建設系 NPO では個々の活動にゆだねられているのが実情でした。

このような状況から脱皮して、公共事業の実施形態が多様化するなかで重要度が高まってくる建設系 NPO 法人相互、あるいは NPO 法人と他の組織(行政、企業、大学等)との連携・協働を促進する「中間支援組織」が必要であるとの認識にいたったわけです。

この背景のもとに、「建設系 NPO 中間支援組織設立準備委員会」が平成 22 年に設置されました。その後、関係団体と精力的に議論をすすめ、さらに NPO 相互の意志の疎通をはかり、より緩やかな形で中間



支援組織に移行できるよう、平成 24 年 4 月「土木学会に建設系 NPO 連絡協議会を立ち上げました。現在 35 法人がこれに加盟して議論に参画しています。

私はこの連絡協議会設立時の発起人の一人として当初より関わりをもって活動をしてきました。

また、これらの土木学会の活動と並行して、関東近辺で活動している建設系 NPO 法人の相互の連携や活動の活性化・発展を期して平成 22 年 10 月に「シビル NPO 連絡会議」が設立されました。

シビルサポートネットワークも設立時からメンバーとして参画し活動をしてきましたが、現在はこの組織も建設系 NPO 連絡協議会の下部組織として一元化されております。

新組織立ち上げの活動は、土木学会 100 周年記念事業の一つとしても採択されており、重要な学会活動の一つであるという認識で、現在精力的な設立準備を行っています。

今後の展開

この中間支援組織は国民生活や国土保全、さらには環境、防災といった国土形成のための社会基盤整備に関し、市民が関与していける仕組みの推進を設立の趣旨・目的としております。

そのために、民間非営利セクターをネットワーク化してその活動の強化をはかり、『新しい公共』や『共助社会づくり』などの政策の一翼を担うべく行政、企業や教育・研究機関、そして住民を含む地域組織との新しいパートナーシップを確立し、共助社会の確立を図る」ことが重要となってきます。この目的を達成するため、想定している事業は以下のものです。

①会員 NPO 法人のデータベース化や必要情報の公表、及び事業活動・組織運営に係わる支

援と、重要な共通認識事項のガイドライン化を図る。

②当該中間支援活動に関する情報公開ならびに関連する国内外の情報の収集、公開、発信を行う。

③民間非営利活動関連分野における政策や制度の調査研究を行い、成果を広報するとともに、それに基づく政策提言・提案等を行う。

④企業や政府・地方公共団体、さらには大学・研究機関などの関係者との交流とそれらに関する諸行事・人材育成等を行う。

⑤各地域の NPO 法人活動のコーディネートと国内外の NPO 法人等とのネットワーク化を進める。

⑥会員 NPO 法人による協働事業化を支援し、総合性を要求される事業を中間支援組織が受託するとともに、事業資金面での連携を図る。

設立する中間支援組織は上述のように土木学会から独立した法人組織を想定していますが、これら

の事業を遂行していく上で、土木学会との連携を引き続き図っていくことがきわめて重要であると考えています。

すなわち、長年にわたり土木学会の活動として行ってきたこと、今後の活動内容が学会活動と密接に関係することが考えられること、活動している人材の多くが土木学会関係者で占められることなど土木学会との連携を図っていくことが最も適切であると考えます。

設立総会は 2014 年 3 月 24 日土木学会講堂にて行う予定となっています。

シビルサポートネットワークもこれからは中間支援



組織をプラットフォームとして活動する機会が出てくることを期待しております。

そして、シビルサポートネットワークとしてこの中間支援組織の活動を支えて行きたいと願っています。

□ 事業報告 □

ユニークな試み

BCP から地域・まちの機能継続へ

埼玉県南卸団地「地域継続計画」勉強会

埼玉県岩槻の埼玉県南卸団地協同組合は、12月12日に地域継続計画の勉強会を開催し、その講師に辻田代表が招かれた。

当組合では、平成 21 年から CSN の指導により BCP (事業継続計画) 策定をおこなっている。その後の取り組みで、卸団地内の企業だけでなく地域との連携も必要との機運がたかまり、周辺住民に呼びかけて BCP をふまえた DCP (地域継続計画) を学ぶことになったものである。

震災などの災害にあっても事業の継続をめざす BCP の導入は、大企業ではすすんでいるが、中小企業ではかなり遅れている。にもかかわらず、当組合が BCP を超えて地域の機能継続を呼びかけることは、前例をみないたいへんユニークな試みである。全国的にも、帰宅困難者対策として都心の企業と地域や行政が取組始めた程度と思われる。

勉強会は、12月12日13時30分から組合会館で開かれ、組合から理事長をはじめ事務局および加盟

企業幹部 20 名、地域の自治会や介護・福祉施設の代表者など約 30 名が出席した。

講義では、地域住民にとって、BCP 概念そのものがなじみないところに急に DCP といわれても、当惑するのではないと思われたので、地域の防災力向上はまず市民や行政職員の意識改革から始まる、とのポイントが冒頭に強調された。

最後に、DCP の実現にむけて、CSN から三つの提案(地域ぐるみの共同勉強会、連携訓練、地域と組合のコミュニケーション活性化)をおこなって、この有意義な勉強会を終えた。



□ 活動報告 □

第 16 回 CSN サロン報告

土 壤 学 と は

日時:2014 年 1 月 13 日(月) 15 時~17 時
 会場:オリンピック記念青少年総合センター会議室
 講師:牛久保明邦氏(東京情報大学学長、東京農
 業大学名誉教授)
 出席者:20 名

第 16 回 CSN サロンは、土壌学の権威であり、フー
 ドロスの減少問題の第一人者でもある牛久保先生
 をゲストスピーカーにお迎えして開催された。

知っているようで知らない“土壌”。

半径 6,400 km の地球の地表、わずか 1m たらすの
 この部分(先生は「地球の垢」と表現された)が、い
 かに大切であるかご講演をきいて初めて学んだ。
 土は何色か? 茶色ではない。黒である。ここに土

を知る出発点があるという。土質には詳しくても土
 壤についてはシロウトばかりの参加者に、先生はわ
 かりやすく説明して下さる。

しかし、正直いってその内容は高度で難しい。

土壌はなぜ肥料を保持できるのかということに
 ついて、たとえばその化学性のプロセスですら我々
 には理解しがたい。

だが、細かいことはさておき、有機肥料の意義を
 おおきく俯瞰できたことはうれしい収穫であった。

土壌と作物が、難しいメカニズムによってバラ
 ンスよく支えられていることを知った。しかし、もっと
 おおきな驚きは、日本のお百姓さんはこのことを経
 験から知っていて、自然の生態系に連綿とうまく寄
 り添ってきてきたことである。

向上は必須であろう。

これからの農業政策は、良好な農業生産基盤維
 持という見地を優先して判断してもらいたい、とお
 話を聞いて痛感した。

サロン終了後、(レストランさくら)に席を移し、牛
 久保先生を囲んで新年会を催した。

宴席での先生は、座談の名手であった。軽妙酒
 脱・当意即妙なギャグを楽しませていただいた。
 ありがとうございました。

土壌は、毎年手入れしないとすぐに酸性土壌にな
 って使いものにならなくなるという。

国はコメの生産調整を目的に減反政策をとったた
 め、一方で休耕田や耕種放棄が生じた。

大事な生産基盤が荒れても政治を優先したので
 あるが、昨秋、2018 年をめどに減反政策を見直すとの
 政府発表があった。土壌学からみてまったくの愚
 策が、約半世紀も続いたのである。今後、国際情勢の
 緊張化や異常気象などにより、食料の自給自足率



先生を囲んで新年会
 レストラン[さくら]

CSN 創立 10 周年記念事業アンケート結果報告

記念出版はとりやめ、記念講演と交流パーティを検討へ

ことし、CSN の創立 10 周年を迎えるにあたり、イベントとして記念出版を企画し、このことについて「記念出版アンケート」として会員のご意見をうかがった。

アンケートは、30 名の会員にお送りしたが、7 名から回答をいただき、回収率は 23%であった。

ご回答

賛成3名、反対 1名、保留3名

ご意見

- 出版は、かなりの力仕事で、奥の方の賛同がなければ実現できない。
- 気軽に参加できるイベントがよい。

以上の結果から、記念出版は会員に受け入れられない企画と判断して、取り下げることにした。

また、これに代わるイベントとして以下のご意見をいただいた。

- 10 周年の事業総括
- 記念講演、会費制のパーティ

- 土木遺産見学ツアー
- 8 月のオープンセミナーの定例化

以上の経緯をうけて、1月13日の役員懇談会において、記念事業をつぎの内容により実施することを決めた。

•10 周年記念セミナー

日時:2014 年 10 月 11 日(土)15 時より

会場:オリンピック記念青少年総合センター

講師:未定

•記念交流パーティ

日時:セミナー終了後(17 時ごろ)

会場:センター内(レストランさくら)(予定)

参加者:10 年間の活動でかかわりのあった方々も招いて、互いのネットワークをつなげていただく

- 記念誌:2014 年 10 月発行季刊誌 7 号(秋季号)
10 周年記念特集号

CSN のうごき

行事・イベント	実施日	参加者
事務局定例会議	11/4、12/4、 1/6	辻田、宇佐、高橋
建設系 NPO 連絡協議会運営幹事会	11/19、12/20 1/21	辻田
土木学会 100 周年記念出版委員会	1/21	辻田
平成 25 年度第 3 回役員懇談会	1/13	辻田、宇佐、高橋、鈴木、 出崎、小川、舌間
第 16 回 CSN サロン	1/13	20 名
活動報告季刊誌第 4 号発行	1/31	

□ トピックス □

**土木学会 100 周年記念出版事業****建設系 NPO 連絡協議会提案タイトル採択される!****「インフラ・まちづくりと新しい公共」**

土木学会は、1914 年に社団法人として設立され、産学官 3 万 6 千名の会員の下で土木工学の進歩および土木事業の発展ならびに土木技術者の資質の向上を図る活動を展開してきている国内でも有数の学会として存在していることは周知のとおりです。

土木学会では、2014 年の創立 100 周年に向けて準備を進めており、記念事業は、学会創立 100 周年にふさわしく、土木の原点に立ち返り、土木の将来に対する示唆を与えるもので、社会に対して、また会員にとって大きな意義を有する様々な事業を公募しております。その中で、100 周年記念出版事業の公募が

あり、建設系 NPO 連絡協議会で「インフラ・まちづくりと新しい公共」のタイトルで応募し、これが採択されました。

早速、編集委員会が組織され、その委員として辻田代表が参加しております。「新しい公共」という言葉自体は社会的に若干の揺らぎはありますが、その概念自体は多少言葉が変わってきたにしてもこれからも一層加速され続ける概念として捉え、土木分野における新しい公共の展開およびその担い方や担い手としての NPO について広く土木界の一般向け教養書として、あるいは学校における講義のサブテキストとしての利用を想定して出版を考えての応募でした。

この出版企画の発端は、一昨年シビル NPO 連絡会議で、NPO および行政評価、行政と市民のパートナーシップなどがご専門で NPO の現場にも詳しい武蔵大学社会学部教授粉川一郎先生のレクチャーを受けことにあります(そのた報告は 2011 年 10 月

号の活動報告に詳しく掲載されております)。

その中で粉川先生から建設系 NPO はもっと知名度をあげる戦略を取らなければいけないことの指摘を受けました。

それにはメディアを利用する事が重要であり、広く世間に建設系 NPO の存在とその活動をアピールしなければいけないとの助言をもとに出版企画の動機となったと言えます。

すでに何度か編集委員会が開催されて A5 版サイズ 200 ページで 1200 部を 2014 年 10 月に発行するスケジュールで進めてきており、ほぼ目次構成も固められつつあります。

目次は 6 章 21 の節で構成し、執筆者の人は著名な大学の先生に依存することなく実際に現場で NPO 活動に従事している方を中心に書こうということになり、辻田代表もその執筆者に人選され執筆を担当することになりました。発行は 2014 年 10 月予定しております。

市民活動デビュー実録

— そこには
心地よい人生が待っていた(下) —

市民参画審議会での活動

吉川市では平成17年4月市民参画条例を施行しまちづくりに対して市民との協働を積極的に推進しようとしています。そして、市民参画審議会は吉川市の条例で定める制度の実効性と市民参画の推進を図るために、市民参画の推進に関する基本的な施策を調査審議する市長の重要な諮問機関です。

吉川市の市民活動に関わり始めてから、やはり行政に対してきちんとした発言をして行きたい、そしてもっと積極的に吉川市の市民参加に関わりたい思いで吉川市の市民参画審議会委員の市民公募に手を上げました。

憾なと感じています。

そこで、平成21年度の第2回の審議会において私は新しい市民参加の手法としてドイツで提唱されたプラヌクストツエシなる手法の試行を提案しました。

その後、この市民参加の新しい手法「市民討議会」は吉川市の市民参加条例に盛り込まれるとともに第1回市民討議会が平成23年に「よしかわまちづくり未来会議」として開催され、私が第1回市民討議会の実行委員長として取りまとめを行いました。今後、この新しい市民参加の手法が多くの市民を巻き込んだ市民参画の突破口となってくれることを大いに期待しています。

また、同審議会において3月に制定された市民と行政の協働に関する基本指針に則り、吉川市において協働を推進する為の協働推進会議(仮称)なる組織の立ち上げが必要であるとの認識が出されました。

行政側はこの種の組織の立ち上げを市民側の自

ここでの委員としての発言やそれに対する行政からの回答は議事録として公開され、審議会で取り上げられた内容はきちんと担保されることとなります。私は平成19年度から平成24年度の間6年間、市民公募委員としてこの審議会で活動し、平成21年度からの4年間は審議会長職を委嘱され活動をして参りました。

行政は市民参画を積極的に促す施策としてパブリックコメントや市民説明会等様々な市民参画の手続きを取っていますが残念ながらそれらの手続きに対する市民の反応は鈍く、結果的には「行政のアリバイ作り」になってしまっていることは極めて遺

発的な立ち上げ機運を切望している様子でした。

志ある市民を集結して行政と力を合わせて何とか立ち上げて行きたいものです。

「吉川市の10年後の未来を考える 私たちの目指すまち」

まちづくり未来会議



地域デビューを振り返って

私は埼玉県の県民となって28年となります。12年は越谷市、16年は現在の吉川市の住民です。

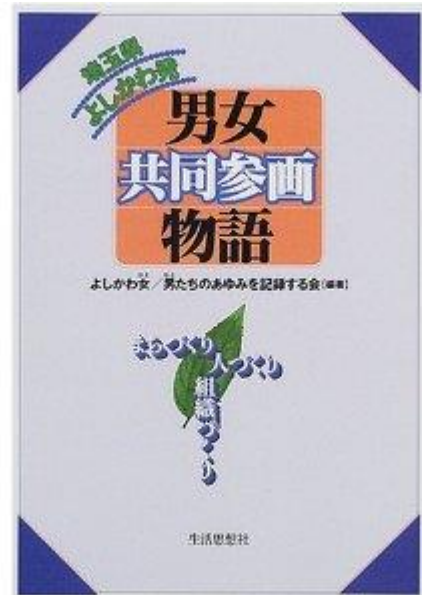
振り返ってみますと私のこの28年間のほとんどはまさに埼玉都民と称されている住民であり、活

動の全ては職場のある東京で行われていました。

正直に申し上げて住んでいる埼玉県のことはもちろん、吉川市のことも詳しく知りませんでした。

そのような私が現在このような形で地域デビューしていることはまさに現役時代には想像も出来ないことでした。「多少は地域とのかかわりをもっておこうか」との本当に軽い気持ちで参加した市民活動も振り返ってみれば今はどっぴりと漬かってしまった感じです。

NPO 連絡会が立ち上がった当初、私は何も知らないままに感じた意見や提案を素直な気持ちで述べてきました。何回目かの会合でメンバーの方が私の地元に関する無知を見かねて、「辻田さん吉川市を勉強するのなら吉川男女共同参画物語という本があるので読んでみたらいかがですか。」と助言して下さいました。早速、その本をお借りして吉川男女共同参画物語を読んでみました。そこには吉川における男女共同参画の立ち上げから現在に至るまでの素晴らしい実録が書かれていました。



そして、なんとNPO連絡会のメンバーの多くの方々がこの本に登壇しているではありませんか。あらためて、知らなかった吉川が少し見えてきた感じでした。

吉川の歴史や文化や吉川のよさが分かると共に地元吉川には素晴らしい人材がいて、そしてその方達は吉川のために今までも多くの素晴らしい活動を

されてきたことを知ったのです。

また、別なメンバーの方が、「辻田さん 少しスピードを落とした方が良いですよ。あなたのスピードに付いて行けないと言っている方が多くいます」と助言してくれました。そのときまでは、私は早急な物事の進め方をしてきたつもりは全くありませんでした。

その助言を受けて、初めて地域の市民活動における物事の進め方は企業とは異なるものであることを知りました。前回の会議に合意したことでも多分にまた今回原点にもどることがあることも知りました。

NPO ネットよしかわの活動の中で、私と同じような企業というバックグラウンドでの論理で論じて、回りから受け入れられずいつしか姿が見えなくなった方もいます。

地域デビューとは難しく簡単ではないことは確かのように。私の場合は幸いにも当時市民参加推進課の中村詠子さんや吉川の市民活動を長年取り組んでいる康憲子さんが全面的にバックアップしてくれたお陰で地域デビューを挫折せずに済んだようです。

また、あらためて何故ここまで市民活動を続けてこられたのかを考えると、その要因は三つ挙げる事ができるのではないかと思います。

一つは自分が何らかの役に立っていること。

二つ目は自分を必要としてくれる人がいること。

そして三つ目は自分のいる場所があることです。

これらは最近ではソーシャルモチベーションと呼ばれているようです。

これから私のような団塊の世代が多く地域社会に帰ってきます。彼らの力を地域のまちづくりに活かさない手はありません。まずは彼らとの出会いの場を持つとともに彼らにソーシャルモチベーションを持ってもらえるような工夫が必要です。

今、私は吉川で多くの仲間達と活動していることに心地よさを感じています。

そして、市民活動を通じて得た多く地域の友人はこれからの私の人生の大切なものと思っております。

(連載終わり)

東南アジア技術者交流そしてジャワ原人探究の旅



出崎 太郎

11 回目の CAFED-31、こしはインドネシアへ

CAFE0(Conference of ASEAN Federation of Engineering Organizations)は今回 31 回目にあたり、2013 年 11 月 10 日から 13 日までインドネシア共和国 (Republic of Indonesia) の首都ジャカルタ (Jakarta) で開催され、今回も参加しました。

CAFE0 は、非政府系組織による東南アジア技術者の交流大会で、構成 10 カ国が毎年持ち回りで開催しています。日本は、オブザーバーとして参加していますが、他に常連国のオーストラリア、韓国のほか今年は EU からの参加もありました。

私は日本技術士会の一員として、初参加の若手技

術者(技術士、技術士補等)3 名、やはり初参加の NTT 技術士の会 4 名と継続的に参加している他 3 名の技術士とともに計 11 人で参加しました。日本からインドネシアへはジャカルタへの直行便とバリ島デンパサール空港への 2 ルートのほか



シンガポール等他国を経由する便がありますが、10 日夜開催される歓迎パーティを目指してほとんどが直行便で入国していました。約 7 時間かかります。

インドネシアは、日本の約 5 倍の面積に 2 億 4000 万人弱が住む立憲共和制の国で、現在の元首は直接選ばれたゴドヨノ大統領です。アジアの最も西側そして南に位置し、赤道をまたいで 1 万数千もの島々のよって成り立っている世界最多の島嶼国です。日本との時差が 2 時間遅れ、1 時間遅れ、時差なしの 3 つのエリアに分かれています。それだけ海洋に広く分布している国なのです。その中で、多様な言語を使用する民族が暮らしており、「多様性のなかの統一」が国家標語になっています。それ故、地域ごとに豊かな自然と独自の文化が育まれています。

ジャカルタはその首都で、人口約 960 万人、この国の経済・政治の中心地であり、日本人をはじめ世界中のビジネスマンが多数在住する東南アジア最大の都市になっています。

私は、10 日(日) 18:00 からの歓迎パーティに間に合わせるために、前日の直行便でジャカルタに入りました。CAFE0 期間中は開催ホテルに宿泊することにし

ているのですが、そのほかはなるべく別なホテルを取るようになっています。開催ホテルはその国の最高級ホテルを使用することが多いので、経費節約のためとまちの雰囲気を楽しむためです。

今回もインドネシア初日は市中のホテルを予約していました。18 時前には空港に着いていたのですが、空港内のポーターとひと悶着あって、タクシーでホテルへ着いたのは 19 時半頃になっていました。しばらく休憩し、21 時ころ食事のために外へ出ました。

どこにいても晩酌は欠かしたくない

インドネシアは、世界最大のイスラム教人口(国民の 87%)を抱えるイスラム大国ですが、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教も政府公認となっており、国民はそのどれかを信仰しなければならないことになっているそうです。イスラム教の人たちはお酒を飲みません。

お酒が大好きな私としては、この国で食事をするときにお酒を飲めるかどうかが大きな関心事で、このときもまずはそれを確かめることにしました。少し歩いて食事のできる大通りに出ると人通りも多く、果物売りや食事のできる屋台が並んでいました。

何軒か地元のレストランを覗き、ビールやワインを飲めるか聞いてみたのですが、どこも置いてありません。日本でよく見かけるコンビニエンスストアに飛び込んだらビールが置いてあったので、ホテルへ戻ってから飲むつもりで2缶買い込み(13,500ルピア、1円≒100ルピア)、中華系のレストランで食事することにしました。メニューになかったスープヌードル(中華そば)を注文し、念のためにビールを頼んでみましたが、やはり置いていません。思い切って持ち込み缶ビールを飲んでよいか聞いてみたら、氷を入れたグラスを持ってきてくれました。特注の中華そばには野菜がたくさんあって、30,000ルピアでした。

翌日はゆっくり起床し、お昼にチェックアウトしてCAFE0のためのホテルへ移動しました。14:00までチェックインできないというので、荷物を預けてコンベンションセンターのCAFE0会場を下見することにしました。大会参加は事前登録制となっており、会場ではその確認と参加費(メンバー以外の一般参加は200米ドル)の支払いで手続きが完了します。しかし、今夕

の歓迎パーティを控えてまだ準備中であり、参加受付も混乱していました。ホテルチェックイン後に出直すことにして、ホテルに戻りました。

歓迎パーティが始まったのは1時間遅れの19時になっていました。主催者側の歓迎スピーチや、インドネシアの民族舞踊がステージ上で繰り広げられました。この場で、日本からの若い参加者と合流し、初めて会う者もいるので、自己紹介や質問等に答えました。パーティの終了間際になってNTT技術士会の参加者が到着し、ホテルへ戻ったときにちょうどミャンマーから直接入国した一人もチェックインしていて、全員の無事到着を確認できました。



今年のテーマ

“ASEAN Community Countries on Green Infrastructure Implementation”

初日はオープンセレモニー、ASEAN各国参加組織の年間活動報告、引き続いてCAFE0組織委AFE0やFIAPのミーティング。若い人たちのプログラムYEAFE0のミーティングもこのとき行われました。この時になって参加者にまだ大会のプログラムが全員に行き届いておらず今年の大会運営の不手際が目立ちました。

2日目はテクニカルセッション(個別の技術研究発表討論会)が行われました。私は専門の建設関連部門に参加したのですが、ミャンマーからの参加者によるベトナム沿岸部の洪水被害とその対策についての報告がありました。2015年ASEAN統合に向けて地域の融合が進んでいるのかな、と感じました。

クローリングセレモニーは、エネルギー大臣の出席のもと行われ、次回開催国ミャンマーに引き継がれました。引き続きさよならパーティが催されました。参加者はナショナルドレスでの参加とステージでのパフ



参加者談笑(ミャンマー、日本、オーストラリア)

ーマンスが求められます。日本チームは全員がステージに上がり、昨年同様メンバーの一人が空手で板を割り、全員で「阿波踊り」を踊って締めくくりました。各国の若い人がたくさんステージに上がり、応援してくれました。ノンアルコールのパーティでした。

AFE0では翌日、テクニカルツアーが企画されていたのですが、私はそれをパスし、3泊4日のジャワ原人探しの旅に出かけました。残る日程をジャワ中部のジャワ原人発掘現場サンギラン(Sangiran)に行ってみたいと思っていたからです。昨日のクローリングセレモニーの後さよならパーティ開催までの間に会場

の外へ出て、現地ツアー会社でソロ(Solo)までの往復航空券を予約していました。

ソロは近くのジョグジャカルタ(Yogyakarta)とともに宮廷文化都市として知られています。11年前に初めて参加した CAFE0-21 はジョグジャカルタで開催されました。このとき市内の王宮での歓迎夕食会で踊られた、すもうダンスが印象に残っています。ソロは人口 52 万人で、ジャワ原人の博物館のあるサンギランへの最寄りの都市。

ジャワ原人への旅

ソロ空港へは 13:00 過ぎに到着し、ガイドブックに乗っているソロ市中のホテルに向けてタクシーを走らせました。しかし、到着したホテルでは満室で宿泊を断られました。近くにあるツーリストインフォメーションセンターで聞いてみたら近くのホテルを紹介してくれたので荷物を抱えたまま徒歩で向かいました。近くまで行った時に突然の降雨にみまわれました。この時期こちらは雨季が始まったところです。ホテルで 3 泊を予約し安心、ひとまず落ち着きました。

落ち着いたら次にすべきは今後の予定、サンギラ

いよいよジャワ原人の探求です。目的地のサンギランまでは約 1 時間。ソロの街を抜けてからは街道を走り、いよいよ村近くになって横道に入りました。最初にめざしたのは博物館。出土品のレプリカが陳列してあるといいます。小さな村にある博物館には大規模な感じがしましたが、平日であったためか来場者はほとんどいません。発掘の状況についても写真で紹介されていました。

ついに立つ、発掘現場サンギラン

博物館のあとで、前から言ってあった発掘現場へ

ンへの道のりの確保です。先ほどのセンターへ出向いて、情報収集です。そこで対応した方が、自分がタクシーで案内するというので頼むことにしました。日本人に案内することもあるらしく、片言の日本語も話せます。42 歳、料金は 1 日で 750,000 ルピア。翌朝ホテル 9 時のピックアップです。

ソロ 2 日目の朝、早起きして徒歩で市内の食材の市場へ向かいました。グリーンマンゴが山積みになっています。グリーンマンゴやみかん、バナナを買って帰路についたのですが、道を間違えてしまい、あわててホテルまで戻りました。ホテルには昨日予約したタクシーの運転手が既に待っていて事なきを得ましたが、おかげで朝食なしでの出発です。



市場の果物

の案内をお願いしました。私にとってはこちらが本命です。ところが、ドライバーは事前にペーパーで申し込んでいないと行けないと言い出したのです。さらに申し入れると、記念碑が建っているのです。そこまでならと言います。そこでもいいからと行ってもらいました。博物館から車で 10 分ぐらいのところでした。

そこには記念碑が建っていましたが、あきらめきれない私はそこから少しだけ奥へ足を踏み込んでみました。記念碑の奥には水田や畑が広がっているだけでした。どこが発掘現場かはわかりません。後ろ髪を引かれる思いで現場を後にしました。



サンギラン
博物館



ジャワ原人
頭骨



発掘記念板



発掘現場の現状

サンギランをあとにしてからは、ソロ近辺の日帰りができる範囲で、2ヶ所の寺院遺跡を案内してもらいました。どちらも山の中腹にあり、世界的にも有名なジャワ茶の畑が山腹に広がります。その途中では、民家の

庭先の木に今朝市場で見たグリーンマンゴが無造作に生っていました。この国の農産物の豊かさが伝わってきます。途中バイクタクシーに乗って巡っていた一人の同年代の日本人と出会いました。定年を迎えて一人で東南アジアを巡り歩いているそうです。



付近の道

帰りのホテルまでの途次、翌日のボロブドゥール (Borobudur) 行きを、鉄道を利用するかタクシーにす

るか迷った挙句、翌日も案内をお願いすることにしました。ボロブドゥールまで 1,000,000 ルピアになります。

その夜は、外に出てマッサージを探し、夕食にイタリアンレストランを選びました。この街ではアルコール飲料が手に入りません。実は、前夜ビールを求めてコンビニを探しましたが、この街にはコンビニが見当たりません。スーパーマーケットはあるのですが、ビールは置いていないのです。ホテル以外ではこのイタリアンレストランしかお酒が飲めないというので、ワインとパスタで夕食をとりました。ソロでのお酒はこの1回かぎりでした。

思い出の地、ボロブドゥール

ボロブドゥールは、ジョグジャカルタの近郊といいますが、その北西 40km ぐらいに位置します。ソロからは 90km ぐらい西になります。朝、ホテルに迎えに来たドライバーと会ってびっくり。本人に急用ができたため 70 歳の父親と代わる、というのです。突然の申し出ですが、受けざるを得ません。乗車してホテルを出発しました。案内の経験はあるようで、片言の英語は話すことができました。

ソロからボロブドゥールへは、ムラピ山の北側を通ります。ムラピ山は活火山で、2010 年にも噴火で多数の犠牲者を出しています。途中の展望台からムラピ山を望めるというので楽しみにしていたのですが、あいにくの雨天で山は望めませんでした。ボロブドゥールへの道は大部分は舗装されているのですが、かなり傷んでおり、補修されないままで使用されています。

昼過ぎに目指すボロブドゥールに到着しました。ここは、最初に CAFE0 に参加したとき高城重厚氏に案内していただいた思い出の場所です。高城さんは、日本技術士会の海外担当の実務者で、今につながる日本と海外との緒制度の礎を築いてく

れた人です。この前年にカンボジアで行われた CAFE0 に初めて参加し、この ASEAN の技術者大会にぜひ日本の若い技術者を参加させて、ASEAN の若い技術者と交流させたいという強い思いを抱きました。そして翌年第 21 回ジョグジャカルタ大会に技術士会青年委員会のメンバー 3 人の参加を実現させたのです。

そのとき他の技術士会メンバーにも声をかけたのですが、それに応じて参加したのは私だけでした。私が CAFE0 に参加することになったきっかけです。残念ながら高城さんは 7 年前に亡くなりました。その後私はその遺志を継いで技術士会の青年メンバーとともに毎年参加を続けているのです。CAFE0 公式行事が終わった翌日、インドネシアで仕事をしていたことのある高城さんが、参加メンバー全員をここボロブドゥールに案内してくれました。私にとって CAFE0 の聖地ともいえる場所でもあります。

世界最大の仏教遺跡、ボロブドゥール

ボロブドゥールは、9 世紀前後に造られた世界最大の仏教遺跡です。建造後 1000 年以上も密林の中で火山灰に埋もれていましたが、オランダの植民地を経てイギリスの統治になったおり、イギリス人知事により 1814

年再発見されたものです。ドライバーと離れてひとりで入場券を手にし、場内へ入ったらすぐ若い女性に声をかけられました。日本語のガイドはいかがですか、というのです。料金を聞いたら 75,000 ルピアというので、頼むことにしました。

到着したときは、11 年前と同様晴れ渡っていたのですが、突然曇りだしました。ガイドに薦められて傘を準備しました。参道から全景をバックに写真を撮ってもらっていたころはよかったのですが、仏塔を巡り始め、シェリーの説明を聞いているうちに、雨が降り出しました。この雨はしだいに強くなりました。この仏塔には隠れるところがないのでカベの陰で弱まるのを待ったのですが、なかなか止まないのであきらめて雨の中を巡ることにしました。説明もそこそこに一番上までかけ上り、前の記憶と重ね合わせて見てまわりました。



日本語ガイド嬢は、専門学校で日本語を勉強しているとのこと。こちらの話すことも分かるし、遺跡の説明も十分できていました。ガイドは英語など他にもいるのですが、このところ日本人の観光客が少なくな

っていて、日本語を勉強する人が減ってきているそうです。日本には来たことがないというので、今度東京オリンピックが開催されることが決まったので、日本語を勉強しているときっと良いことがあるよ、と言ったのですが、オリンピックことは知りませんでした。ひらがなしか分からないけどと言ってメールアドレスを教えてくださいましたので、年が明けてから新年の挨拶メールを送ったのですが、まだ返事をもらえていません。



その後、雨中の渋滞を経てやはり世界文化遺産のプランバナン(Prambanan)に寄り、ソロに戻りました。老齢のドライバーに特に不都合はありませんでした。帰途子息である昨日のドライバーの家に立寄りしましたが、子息とそのお嬢さんが出迎えてくれました。ホテルへは 2 台の車で送ってくれました。たぶん今日使った車を返したあと父親を乗せて帰ったのでしょう。そんなこともあって、ホテルへ戻ったのは夜 7 時を過ぎていました。

最終日は、夕方のジャワ行き航空機出発までの時間を、市内の観光とお土産の調達にあてました。元王族の子孫が現在も住んでいるという王宮を見学したときにはまた日本語ガイドが現れました。昨日のガイドよりちょっとお姉さんです。やはり、専門学校で日本語を勉強しているということでした。料金は気持ちでよいということでしたので 50,000 ルピアを支払いました。ガイドは感謝して受け取ってくれました。お土産は別の王宮近くの市場でシルクなどの布製品を、また小さな骨董品市場で、昔伝統舞踊に使用したとみられるお面をペアで買いました。

その日の深夜便で、ジャカルタから成田へ飛びました。



これからも先人の遺志を継いでいきたい

CAFE0 への参加も今回から2順目になります。CAFE0 自体のマンネリ化、日本から参加する若い技術者が毎年変わるために ASEAN 技術者との人脈形成が進まないなど課題もありますが、参加者が一同に集まり、年に一回交流することの意味は大きいと考えています。

日本からの参加者も継続して 3 名が固定し、毎年入れ替わる若い技術者が 3 名、それにプラスアルファの参加が得られるようになりました。

今後も先人の遺志を継いでできるだけ参加を継続したいと思っています。



編集後記

・ 本誌を季刊化して、本号で四季がそろったので、この1年ふりかえてみた。

・ お気づきないと思うが、冒頭の「シビルサポートネットワーク」の題字囲み枠の下地は、春夏秋冬をイメージする色にして毎号変えている。

季刊第1号編集時に、冬季号は「白」とばくぜんと考えていたが、今回とりかかって、はたと困った。下地が白色か白紙か、区別つかないのである。

・ 1年やってみて、わかったことがある。

誌面の組み方だが、横書きの場合、一般的には手紙のように一面べたつりと続くか、あるいは2列になっていて、1列目を上から下へと読みすすみ、2列目の上へ移るといった形式が多い。

ところが、わが CSN ニュースはインターネット配信なので、ほとんどの読者は PC 画面で読むことになる。すると、上から下へスクロールしながら読まねばならず、面倒だし読みづらいのではないかな？

そこで、誌面を左から右へ横に見るようにすれば読みやすいし、字を→方向に追う目の習性にもかんうはずだ。

さんざん試みて、なんとか雪の感じができたように思うが、いかがだろうか？

・ 季刊誌になったら、月刊よりは見場のよい体裁にしたかった。

だが、シロウトのうえ編集ソフトもなく、ワードにひたすら切り張りを繰り返すだけというじつに原始的かつ時間をくう編集方法なので、より良い誌面作りには限界があるようだ。

拙宅の PC でテストすると、A4のドキュメントを表示倍率100%で見た場合、誌面を3段組にすると、画面ひとつに収まって読みやすいようだ。

ただし、3段組は初歩的手法しか持たない当編集部にとってははなはだ手間がかかる作業なので、やむをえず本号は2段組になっている。

・ むかしから同じようにみえる本の誌面も、こうして刻々と変わらざるをえず、PC に合わせた紙面対応にいつのまにか巻き込まれている古希の自分に、思わず苦笑してしまった。

(事務局:高橋 肇)